

10 9 8 7 6 5 4 3 2 1 JAPAN

古今考略全



序

ソラノトトヨガアリシミタニ見のたゞきテ
トハモボヌテウチテ^{ウチモキタダニ}諸紳士ヲ^{カミ}人
ひの本の事^{キガ}をモリテ、ああ^{アラ}と^カシム序^{フロジカキ}書く
モノ^{モノ}トモリソラノトトヨガアリシ
トナカシテ、タラキ事^{カシタ}、^{カシタ}ハラスミテ
カシタリタリタリタリタリタリタリ

まへいへたの月つきとすらもひすま
三弓橋ミヤコハシへれたる岸アマにうきもくまくわの
夜ようちあたるよすむちかくはしこどよふ
かまくらて行ゆき人ヒトよみくらればく人ヒトて
いくとおはづがはくねる事ことあざや秋あきの度
足あしばかりのあらん



仙女志れ事うは

友よ仙女あり。名を志れ事うは。どうハ百とせすよゆとさせた
らで。そのなりよめけること。妻女乃ど。お東の川のまよ
住むて。世よひろく地志る事うと。おぐらまよ。是とあるくい
ゆじとく人達。極きとうしゆゆく人れ地と懷よ
してあるとく。其事よいと。忽ちれく。是よかさぞ。
仙女又えりとちふく。極よ多々。さらハ仙女。被章てゆく。
秋今傳すう物され乃より。忘却。先のつぐりも。是
又それよみづくら。カヌ。とくとて。おゆ。今。ハ先を忘却
先を乃殺とす。もす。又是となす。じとりよ。彼よ

勢ひもことりひて。はとう乃妻也。とがくとよく。日。
あれあそべく。ごもく公ハ狗のうち。あうと。めり。ご
修よきか。もとをもく。是よつけ。彼をられ。うれよ
けざれと。あれ。まれて。ハ母の後。すう一付と。あれ。生法
て。ハ。既。すう一と。きを。あれ。老て。ハ。が。う。も。じ。う。と。され。
かく。根。も。く。ね。ゆ。ゑ。よ。死。お。ば。り。け。う。因。乃。残。く。も。く。と。も。
され。も。あれ。ば。公。ア。と。よ。う。あ。く。わ。と。わ。く。と。お。今
城。の。ご。み。あ。ま。よ。う。そ。旅。志。う。御。と。つ。と。ま。う。は。
ゆ。き。は。と。原。く。が。と。も。つ。じ。よ。う。れ。や。これ。と
つ。き。く。人。と。旅。志。う。ん。エ。お。く。ハ。黄。泉。年。後。ユ。ま。は

ちの秋乃音きはもやをきひと。だらまくわえ
がまよへとよりなひし。られうへくと遊くやと
よみゆり。先故のむねハかくのど。おもむれんと
おぼさんよへ。圓を大きく写さう。ゆきもくさう
いをく。これ類乃はうつかり。初頂をうつてせーと。肩
きりくお二と。鼻をうつてせーと。その次ハ乳房
あり腰よ及び。左右の耳肩を御よりうそ。おもとろ
毛三千本。それとくーーあくまよばづ頂とおれと
そるよハ公と御よやく圓をおれんとおもよハ公エ縫エ
ササ花にはうらひちをあくよハ左をあひ。たとえ

よ太をやふをとく。おひよりうそ。脚く身とおれ
修よ秋もとをくにゆる。先今ハこれまくすす
ゆく。ねあそとひく。おとよ。その人とも様とおれ
物とおれ病人とつまれ。おとよを甚めとあらひと
おじして。おとよく。仙女がりとよつれ。仙女又嫁給と
おとよ。仙女曰うへく。まづね三十をうへハたかよおれゆう
とく。仙女曰うへく。今口をへ。待ちがひとうのゆう
ゆうとうひく。あとひそら。揃えちうけたる。おれとおれ
お遊び出。戸とまへがちくいもく。先春の門とある。

次よ。考をもと見る。たぎよ庵タキヨアカとある。柳タツノと玉毛タマモと云ふ
る。雪シロの庵アカと云ふ。風樹ウニキとある。山教サンギョウをもつて。而よ。そ
子コノに及ぶ。秋アキあり。宿室スルマツをほぐして。代カタの家カミで或オ
そあきふをもつて。りうとある。のびあれまつて。彼カミよは
ぬあれのをもとへゆり。ちゆく。眞儀マジギともろかマロカのそ
ぞが。もの術モノノハラフつて。ねほネホひとらのとくらむ。ぬま大
ゆゆかくやりして。口カミをくわとく。口カミをくわとく。御ミコトいは
きくらうれど。跡ハタケがかりる。すまなあく。仙女センジがぬをき
すも遠アキハざれば。或因人アヒンジン居リ。さる男サルガイともう。まわる真美
とおカクくとツバ。仙女声センジノヒナガとひそめく。あく曰ハシメがりむ。

手ハとわハだ。あれ財ガハの肉ミと置シタけよ。交タマシく。せきせきの忘れ
手ハと取ハシメよ。きく。乞ハシメよ。考ハシメく。食シタひなまハシメ。大ハシメ。あれの先ハシメ
とちうのうをとく。まほ。ぬまのうひやうハシメひとぐ
世ハシメをふとく。ねすハシメすとく。やりひハシメか。彼カミ神文ミコトノヒタガハ。
そあたハシメとせよ。度ハシメく。まく。に。仙女センジうちもハシメだらま。
秋ハシメはそよ。世ハシメよみく。づたす。うご。そと。おん。うと
ゆく。終ハシメよ。ねむれ。乃ハシメ術ハラフとか。ひとど。

東都志稿

○ 月夜の夜もあくを平げんとく。かの山よりすすめ。伊勢乃
お小侍のぬよひうて。持食まうめは。佩せし所大刀
をひとねの梢ようけく。修よされきく。ござりありぬ。
評曰、これ勇なり
○ 白れを食ふの天皇ハ。雄畧ニ。萬葉ノ名。よ。物語
とヒム

○白雲庵食事の天皇ハ。雄畧ニニ勝川のちよ物モノトア通女ヒトガタ
セ観覽ミラストナシ。ひ。タメ大オホトメテ。入アリモト。の。あ。ひ。
ち。キ。ア。セ。ク。チ。ル。ウ。ア。コ。ト。ハ。十。年。ア。リ。之。洋。國。中。ア。レ。シ。

○あはは。おのれの古事記と見え
ル。アリト。

ひを取る。さうむかねうそも。又ゆくの名前をよかうえ。
ぬまれうれい。おのれのものもあがくうれとぞりひかる。
○記憶とりすりのくらうくらう。或人乞めふえんとぞゆく入
る。かくよやく捕のとぞうくとぞく。まと隠すく。狗と
たゞけと投魯すうかば。隠すやつをく。隠すく。狗と
隠すく。やまきよ。隠すく。隠すく。隠すく。彼
かう。隠すく。かう。隠すく。隠すく。隠すく。彼

○むかへやあうるそとゆく男のこゝにまどりへと
ひきうちれば第。

今までもにまかぬ人せまわらう。わがうまもぐ年れど、おまへ

とりひく男なりあひとまれよこう
也の状をかみて人達をと

他の研究室とお風ひ習じたる人ひと。健者けんしゃとよく夜よあかり。

○大波入の唐經ハ。わまろ一きゆとちれども。

○アラサガニアリ。わざれも。が。アリ。トカバ。ベシ。モ。アサガ
の。真。アリ。アリ。ヤ。ト。アリ。ガ。アリ。モ。神。アリ。ミ。モ。往。通。ヒ。リ。
○今。アリ。色。系。の。狂。女。名。局。の。玄。れ。ス。ク。ア。人。ミ。モ。ア。ト。ヤ。ミ。
ア。ド。ヒ。リ。ア。リ。ト。ヨ。奥。色。系。ト。ア。リ。の。ア。リ。タ。リ。人。狂。狂。サ。ム。麻。

あひうが別名附よ物つりえ。又あひうをまもぐらどりけ
せ。彼杜ふられとみくそやりひわすんとつよ。様よ新あく
うをすりのこ居く。是を呼むが。縁よもよごてかくせん。
やりひれんと六七きからよ。うひもきべとちれなよ。とうたひて
あくける。浮きよ此杜ふられ事が傳とねづく。
○契の良官にあらずて奥次第含ふ。ちねくふが罪あにか。見ええ
く含ふが罪かきかと。休和焉よ里ひれば。一休言へて。仁とす
ゆきとす。一が充れうとぞ。

○
擧^ま乃^ま事^まも^ま物^まも^ま甘^ま
人^ま多^まかう^ま

○ ちりふ散ハヨク 託^{シテ}れど。門のあ上。歸^シつまたる 準^シをむかひれ
ホコ^ク
カク

おまちたる人をさうめりとひふ人あり。傍乃人曰
それハ想付乃ちひゆう。译曰 想付 由
ヨハスヒト
想付 由
ヨハスヒト

さ
○よろむ男。ゆよりひきだらえく。ゆすもあくまでほむる。さすとみ

あたゞくよみをあわば。男あくゆくとそ。

○桂生は故となりて完人あり。よく詩の毒をすくひとぞ居たる。

あらまちまくらりて今わ諱^{シカミ}ある。能^{ハシマ}むとのとすまちあら
ごとく御^{ミタニ}よと作^{ハシマ}れバ。は頃^{ヒモト}まをうて。今般^{ヒル}ようくお行^{ハシマ}
く仕^{ハシマ}うるが。併^{ヒル}よ年^{ハシマ}財^{ハシマ}の経^{ハシマ}あり。もくろよめあられつまうる
よ。大勅^{ハシマ}のたまうアやうれバ。船^{ハシマ}づくらひよりハ许^{ハシマ}レたまうと
ヤくまかんで下る。詳白^{ハシマ}よ

志^シと病^{アリ}たりた^ハ。○
あめりひと
天^{アメニ}若^{ヒト}と^ハ。○^{よもんかわんか}
天^{アメニ}鳥^{トリ}大^カ仰^ハ。○^{おほく}
仰^ハの御^ミほ^スく。○^ス
酒^{サケ}御^ミよ^シう^カろ^ス。
か大^カは貴^ミの^カき^カひ^カ。○^ヒ
か大^カは貴^ミの^カき^カひ^カ。

御よほううごとやことをあれよろ。

○黄帝赤水のやとうよ極びく。玄陰とある。極徳うともえく
ゆうんとをからくよ。象罔とりひたあれ人あり。率はまて
とうかう。或人译曰智恵ハ乞スル小物

○遺却珊瑚湖鏡白馬鷲不羽或译曰遺却からく鷲廢情

○向應並木宮乃天皇。或烈民公スルよ仰よこゆりと。すがれ
させゆびる。

○ぬされまう媒彼後ミタニの席セキよしよくハ。宿スルとつて。忌言ミニすれバ。
ひけとくとおもひうーと。すくられドトナリい居リうが。

叔徳ひもみく人ヒマカクんとももる。け媒秋ヒメ秋ヒメあらまかく
とりひきくろと。僕カクのカク人ヒトひづきくりくシテそれが庵カキとはシテそれ
岱タケとゆりひくシテまかくシテくろんシテのシテく幸ラカる。

○あわりいかさんともうへば。がくらも因ウチ代スルてシテとあく
りのシテ。译曰眼メガとよもぐハ櫻シロヤシのうちシテとみくら。とあくハ
く幸ラカにシテをはくシテ。

○女三乃君小侍徳よまことえよハ。いごとよみーやどよう
と。译曰けあれまほよ。柏木の唐カジカつをこうシテなまく。
と。柏カジか年カツ乃佛ブダ乃伎弟モジヂ。繼スルアゲラウシテノ第シテ一シテは。あく

りのことをぞうへかば。舍利弗もぐ饅頭に。仏香積國
より香積後どうよをくくもせりバ。舍利弗たらあら
食念と忘れし。家人評白をかうじび事の経^ノ
○あざれなる人ちがひも門もあく。御をこまかよからむて
あゆむの。

○或人山林をゆき。道を忘れくあらぬるよ迷ひが一かば。
足歩きまことに大き形うつむ木乃あらよ入るづくあら居
る。もやーあら人入稀ごとく迷ひあらぬ。宿^ハこりくぞ
名前られて安よ來一ものとす。さくばどくとくひき
りきくあらとす。ひとうまのぞくしてあれづ。などと

○ハ道を忘れくあらとす。さくばとくとく今ふに
人を失くしてぞうそくたまよめりくかけたりとぬる西の
ころ。大きなる船あるをくのりをひくだく。その三人す
のすんとも船三人すすふ南^シむさん^{アラ}とく。されば言ひりとす。
わちう洋口。をせりとひく室の家よまかへだう。

○歎八月をう。佛よ世間たく空氣く。あの庵あれとよみ
した船^ハ重^{ヒモミ}艘^{モツ}あらう居すあづみ。人ハ千人あらう矣^セる
とき。船^スと縁の處^ハあひきついたる船かう。ねあよ
きけば。りとめごとく船^ハもくとくかくよとぞ。評白を
うが葉す

○みをと室。四時あくまうよ。どうへ計もううきりたる老人ある。
金親
戸相
は老人舟をやうせりうよ。その舟もうめくる節のゆくとせ
もあり舟あらそくたりづべーとゆひくれば。箇入家とと
差々曰。ゆまと七十年御りハたそりづべーとりゆい。じを人ま
て。ゆちがとうけああびーをしりひり。筋向け老人我意と
あれうえ。

○ 雪兔シロクモを冬よりアリとアサハ役と捕サシタてスノウケ網シマツひつよ。
おぐま丸オグママルのまく。吟ギムんともちよす雀事トリモノが。またくさく
のびるハキシマウラ。
○ 笠紫フクシよきさく。佐々木ササキ人ヒトのす。

あぬがかる鄙に、
年恒舊くみとひす。去らるる
傳言そもへ。おの身俗といふ、
帶はひきもひゆくもひ。
駿はまくいひひまくゆい。が歎又ちく短し。たとえみとこよ

あぬがかる鄙に今年恒處てみことありまら玉す
停向そもくかの風俗とりふ。常々まくじもひ修^{ヒキ}じもび。
誓ハまくいひまくゆひ。が歎又ちく短^{ハラリコロ}。たとえちこよ
恆^{ヒタチ}とくとよ。めぐやうひまはあ^ハと前^ハん。
○右近^{ウジン}が肩^のときとえすが。めらうがの肩^の方^へりふいをと。ゆ
たまひいな^ハ。第^ハなんちれを^ハと。とくよ人^ハかく。先
き^ハとまくちれ^ハ。めらうがの肩^の
そもくかわらざとそろぐ。た第^ハ内^{ヒテ}も^ハ。一^ハとあるとと^ハ、
○或^ハ兵士^ハと人のほよつまく。まご^ハ人のかまうとむりやひ^ハよ
御^ハのまぐ^ハとえをす。楠^ハに歎^ハ行^ハよ引^ハれのまみ。

あゆたうまくかきたるふ。ひとそあくはくくとみえ
片瀬小人（いしてこじん）もあまられば。あくく便のむひとやめりぬ。そ
の名と回れくありひそく一すくふ。楠（くすのき）門_{（かどり）}轟_{（ごう）}と
多_{（おほ）}び。よいかげわりひーかば。今一度_{（いつたび）}あらんとゆひか
さわく。わとゆひーかどもくもすわがを。楠田門轟_{（くすのきだい）}と
しづるやくらふへいくとスの轟_{（ごう）}とのづかーくる。
使主_{（つかぬし）}人乃とふかうてすり代_{（しろ）}や絶り。織_{（おり）}書_{（しょ）}をあく。
今日ようふか乃多事_{（ごとごと）}もほく。楠田門轟_{（くすのきだい）}と仕_{（つか）}た
といひかーくうされば。ま人あくしみたり。行_{（ゆき）}と作_{（つく）}
されり。今日なん處_{（ところ）}のよたまく。がくゆうとぞう」と

ヤ上_{（の）}されば。ま人公ある今き。代_{（しろ）}よねされまくるよ
そりれ。医床_{（いとう）}乃圖_{（かず）}よせばうぞれー。ハとありきを
れとこうて。頃_{（ヒルトコト）}不_{（アシテ）}も加_{（カスメ）}湯_{（ゆ）}ぬひよもあくとくうる。

○この景とされば。物貰_{（うけ）}せたる人_{（ひと）}へ貰_{（うけ）}る人乃とふたち
かく。貰_{（うけ）}る人ハ初室_{（はじむろ）}あらる人の洋_{（よ）}よしゆく。或_{（も）}
きざりしハ夢_{（ゆめ）}。或_{（も）}ハよじびあるひはゆく。すくは_{（すくは）}
算_{（さん）}すうく。足_{（あし）}とみやくふ下（さへ）のぞれば。ねは風_{（かぜ）}を

すまく。ぐそハまれる_{（オモイキ）}新_{（しん）}色_{（いろ）}。

○わきみもる長_{（とこ）}あ。ひこうの母死_{（し）}るふ。従弟_{（どうぢ）}ぞもうら參
く。がくあくせよとくいれば。すせずと。とりよ。何_{（なに）}と

とバ。かとあそ今ハ仇されとよみつれバ。人よるびきを
廻ル。せくいよせんとりひる。浮白人量あよ じんりょうを廻ル。かくまく
みく。さくまくはちまくしまのとしもんや。

○或人されがみとらすバ。い取る。公よかとどひるま。人言
「今日。され羅ざわ」とふとすうと。浮白世人あよ じんの人が何ぞされ
羅ざわかん。

○ある男女よねりひくとざりて。今夜ハ衣きぬ浮うきよあく麻
よ。門もんもとあぐにふといひちぎうて。おその衣きぬあされく
變かわ入いりタ。女めあく門もんをねぐよめきがござうされば。たゞか
られことわすひく。そのまことにかづらんもくらぎく。

○脚註跡あとたとふ。ほる男未めかくまなが。みづけくそのかく
わく。行ゆひよ妻めとくとく。宿居きゆうたり。被はされ方かたとこ。
女めうちあくしーかば。往むかく行ゆく多おほふ。そこの妻めとく
居ゐとかど男おとこされときば。何なんともいひだ。女めも又また何なんといひだ。
その男おとこ何なんともいひだ。浮白眾うきしゆうなり。

○脚註著あきふ。食くふ。史しのう。ごめく。が終おひよ擣つぶとあくまく充あふがる。
ひながうたのーかむとあくど。彼かれえうごめくの附つきとばされ
たるゆべ。

○かく羅ざわハ行ゆるの義ぎのりとふ。浮年うきとせわううマト。すくれまひ
ーに。天あまの船ふね車くるまとめうてむくすとま。ばくはるの

えれと情みて。うげきよひーよ。天のむうべやく
くといまきて。天のね夜とうらみせをれハ。暮ととや
とわがくるかまくまれようと。えよ舞生くら人
洋曰。おもとにハ。よかうあへて。まくら人像を看てさり
一そくあうて。田。め箇。か道

○大宰大監スは百代が奇よ

ぬる玉乃きの歌れ稀代に。見ゆくおらぞ。あまうらのゆを

洋曰。これあよ稀きうんや。

○仏の跡は八百人乃至よ。お名とりふた人あう。これハ利事
貪著して。がうくの跡と後むとりども。あうて不善

と。あり。洋曰モテハ。わケル。うま。何。いよ。か。多。年。食。ふ。と。ハ。難
む。ひ。も。ほ。の。せ。も。あれ。そ。く。わ。く。う。と。ハ。づ。れ。

○僧人相文とす。の通詩乃。房。よ。室。く。そ。く。ま。國。す。も。ち。軍。と
り。よ。ゆ。ゆ。も。る。る。無。詩。の。回。い。よ。も。も。ゆ。相。文。又。回。い。ゆ。ゆ。と
考。又。これ。よ。ゆ。く。考。所。年。乃。か。よ。を。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。と。も。と
り。よ。ゆ。よ。せ。め。く。ハ。房。香。く。そ。の。り。え。み。と。お。れ。ん。と。ゆ。ゆ。ゆ。
お。お。え。そ。の。心。と。り。バ。相。文。す。く。秋。圓。し。じ。う。ハ。ま。う。ひ。め。ら
一。今。ハ。せ。の。中。ア。せ。あ。う。た。る。よ。う。一。年。と。お。れ。ま。う。じ。う。と
そ。ま。年。令。ハ。モ。あ。う。と。り。よ。洋。曰。洋。な。り。

つあふ人にむとへりれりすみかすすと四ひれば。或く
にそそぎたるすとひそとをめり。ゆきへまよとらひてゐ。
さくやもがくすまうちをれく。ゆゑんめりく
せくまへがどとひかりもふ。おりいわざりえれば。又
せきのすりはねとかとくすきとゆひれば。にせとひれ
うたるすとくとひれば。ゆきまよはぬまくすく
ひりよとてゆくえくみをれよぢ。深白ニスアゲルヒトガ
近所よ様久とくふ男あき。を能うろだるをあれがえ

○若荷とあわと多く食ひ。わざれもくとりふ或旅等を乃
古

事は御へよ乞ひんまくともせりまよ。然とくゆとえれバ。
あくやれとうち病ひそゆのう。はよめりバ、高熱ハ有れ
て、つゆきるうき。汗曰は事は事も無くぬつてよこそ。

てつよりうすり御田は事も無くあつひよ
○白石氣と角ひ。よく剣くもぐりが黒き角よ裏吹
六九くはハ被訓人をされまく。
○ち近ぐ人をちがくまよ。男ちがうをされまくれバ。

○ 情白實你
○ 情多望主 却様ゆくとひく。自若乃山の藤よりうた
もくめうよ。主翁もけく葉落枝葉もくとまく。

御内實傳
えのうちのじよへん

おれつて夏かとおわづかへきてみどりをさんと
ゆく。おまえたちがよ。あれととくとあれば。ハの匂ひあり
く。おれ。

○あちこち人一人とまあまく。あきく廻る答へあたるふ。
ひとりの男衆おとこがひそかにうるす。今ひそかに飲取く
とりあそびの男おとこをとらえて擄とらうて。ひそかにあらうとふよ。あそ
みあそびく飲くてあそぶとさうなる。ぬるい酒さけをゆく。來よ
りたるよれらば。附つは三財ありまされど。腰こしのあらけ
せざうとかば。傷いたよ詠よひと歌うたくがえれば。テの男おとこら故
主ぬしあるきゆハ無むうてあれ。主ぬしハあまうよ

○ やう遠くよゆきよ。鹿の射られたちがちとあまく。あらう
里よをあれどやみそかよ。六とさうじ。雲とふく。志

とくらむすべ。人をあぐもあがたひよ。終まうかきく
あゆみうる。ものあわまよさくさくとくらう。さあてたひ
かえれば、まかきうつゆまいとくま。他の人をうけま
とうまくえばあいづ。根莖^{カニラ}をハヌウ^{ハヌウ}をどり。

豪傑ヒードキを食カクすの底ハタチから一人親ヒトシシテもそくはなづ。せよおもくほ
かうりぬカウリヌざう一肉イモトねのえまたあエマタアゲ即ハヤシテとりすりはちれさうき
今イマかくすカクスてハヌハヌモの心ハコハとをうそううと。詳ハラハラ言ハシマスヌかびと

卷之二

○むうせ翁人あきへにまの附今すもあくすりおなれを
トトカモアムトモはくひてのこ居ーとぞ。むう又
人あうて只人何をあらんや。所せぬむづくらひあれよ。
又秋のすくよをままで。毛と布充あとの業とりふ。総白
ちづめのせ翁人ハねだれをゆく。ゆの入ハ無れども。
○ゆよ陽あらむる君^{かきる}だまく セよまよとたハ。往^かるゆき方^か
ぞよととよとと。とくく ちよとみちよ。人要^いぐけろ
東^{アサカ}と^{アサカ}き人のとくよどぐ居^{アサカ}。お^{アサカ}よゆくゆうとそ。と^{アサカ}望^{アサカ}
まちゆり一かば。室^{アサカ}あすもつまとぞ。と^{アサカ}望^{アサカ}

せんへせりゆむちうとどよきとくらごとみえれば。翁とくわ
ても。とひりごとあつたよ。筆ハエをそれめ。とくぎくよお義い
てとくわくくさうる。おほけりとおざくよ。徳うればざハ
きも其便よハカトメる。なりとそ。さくばえれハあようう
てう。どうひう。徳マ一と責まれば。是ハ徳あくと。翁とくわ
きくがきれハねよまうてかど。ひう。徳う。徳う。徳う。徳う
とあよ。翁何方アリ。すせぐ。徳ヘ十日あまう。おひきうろに
万う。徳う。徳う。徳う。徳う。徳う。徳う。徳う。徳う。徳う。徳う。
タレバ翁。

あきハこれぞよう。死舌もあくと
とりひがく

あきハこれぞよう。死舌もあくと
とりひがく

タリ。翁の臣。翁の臣。

○ トカ。翁もるを。スルに。鉢と。あらう。よ。纏。モバ。ゆ。秋。モリ。ウ。ク。と
竹。筋。れ。ば。き。ま。づ。筋。の。経。ハ。室。と。走。れ。ぞ。と。走。め。づ。る。高。モ.
一。室。と。走。れ。く。ち。筋。ふ。と。ま。う。又。モ。一。筋。モ。走。れ。く。筋。モ。高。モ。
て。万。筋。モ。走。れ。く。走。れ。く。あ。じ。ぎ。よ。や。な。と。走。れ。く。筋。モ。高。モ。
此。と。走。れ。く。筋。モ。高。モ。走。れ。く。人。評。曰。て。あ。む。ト。

明和九年辰正月

十七

序章町五位光上子

回訪

吉野屋七兵衛

梅村 宗五郎

鶴門五位光上子

浅井 庄左門

梓 行

